

宗教的意味の伝達と変容 —ゾロアスター教徒パーシーの祈りを材料として—

Coherence and modification of religious meaning
—an analysis of prayers in Zoroastrian Parsis in Navsari, Gujarat, India—

中別府 温和

小論の目的は、宗教現象の具体的なあり方を、祈りという宗教行動をとおして明らかにすることである。研究対象は、インド西北沿岸地域グジャラート (Gujarat) 州ナウサリ (Navsari) に現存するゾロアスター教徒パーシー (Zoroastrian Parsis) である。具体的な調査方法は、質問紙表を使用しての面接法であり、収集した事例数は 300 である。

ゾロアスター教徒パーシーの祈りの調査と分析は、3つの仮説を検証する形で行われたが、調査の結果は、設定された仮説に反して、特別に重要と考えられてきている祈りの意味が、それらをとなえる人々によってほとんど理解されていないことを明らかにした。

なぜ、ゾロアスター教徒が最も重要であると考える祈りの意味が、ほとんどといってよいほど身につけられておらず、かつ伝えられていないのか。この問題を、1) 言語の問題 2) 布教と改宗の禁止の問題、3) 宗教教育の問題から分析した。

キーワード：祈り、言葉、宗教行動、宗教的意味、ゾロアスター教、パーシー

目次

I 問題と目的

II 研究方法

III 結果と考察

1 全体の概要

1) ゾロアスター教徒パーシーの祈り

(1) 「小さな義務の祈り」

(2) 特別に重要な祈り

2) 特に重要とされている祈りは、日々の祈りの全体の中で、どのように祈られているか。

3) 特に重要とされている祈りの意味は、どの程度理解されているのか。

4) 特に重要とされている祈りは、どのような場面で祈られているか。

5) 聖なる火に対して何を祈るか。

2 二三の問題

- 1) 言語の問題
- 2) 布教と改宗の禁止の問題
- 3) 宗教教育の問題

IV 結びにかえて—今後の課題と展望—

I 問題と目的

小論の目的は、宗教現象の具体的なあり方を、祈りをとおして明らかにすることである。

宗教は、それを信じている人たちの現実の生活のすべての面にしみだしている。¹⁾ ちょうど言語が文法によって生きているのではないように、宗教は単に教えや聖典によって生きているのではない。言語が話し手の生活のすべての面において使われているように、宗教はそれを信じている人たちの毎日の生活のあらゆる面に生きている。家族や親族のあり方、政治的態度、経済的活動、この世をどうとらえるか、幸福のとらえ方などに、宗教はいろいろな形と程度で現れている。この意味で、宗教は文化的で社会的な営みである。

また、宗教は、ティリッヒや岸本がいうように、²⁾ 究極的な関心 (ultimate concern) に応える人間の営みである。究極的な関心に応える営みとは、そのままにしておく、人間や人間が作り出した科学があきらめてしまう問題、たとえば死や分かりやすい説明のつけようもない大きな困難や悲哀をあきらめずに、それらの問題や課題に取り組み、それらを解決しようとするものである。ある病気に医者がその合理的な判断から一つの結論を示したとしても、それをあきらめないのが宗教である。これを考えられることにするものが神である。神はすべての人間を超えているからである。そうした神を覚えていて忘れずに生きることは、単に人間の言葉や行動のレベルだけでものごとを判断し、それらだけを意味のある結論としないことである。たとえ、その時々人間の言葉や行動が、どのように分かりやすく意味のあるものであっても。宗教は、人間が実現させるどのようなことをも超えて、さらに意味のあることが起こりうることを教えているのである。

また、逆に、医者が治療をほどこし、その後の看護があつて病が治った場合に、宗教はそれらを単に医療に関わった人たちだけの優れた技術や配慮および本人や身近な人たちの態度の結果にだけ結びつけない。その医療にたずさわった人たちの技術やコミュニケーションを成り立たせ、それらを望ましい形に導いた力があつた、つまり、神がその病が治ることを望んだから、医者、患者、看護者の目的はかなえられたと考えていくのが宗教である。信仰の深い人に著しく見出すことができるへりくんだり、そのへりくだりに支えられて絶えず生み出されてくる行動力と生かされて生きているという感覚は、このような考え方やふるまいに人間を導く神を自覚して生きていくことから結果しているのである。

このように、宗教は、それを信じる人たちのすべての考えと行動に意味を与えている。生まれてきた子どもにどのように名前をつけるか、どの政党のどの政策を支持するか、どのように働いて生きていくかなどについて意味を与えているのが宗教である。したがって、宗教はそれを信じる人たちの生活の一部ではなく、その全体と関わる。その関わり方は、一時的ではなく持続的であることを特徴とする。

ところで、宗教は、そうした意味を、宗教的行動とそれに結びつくシンボル群によって、人々に伝えていく。小論が取り上げる祈りは、この点に関係する。祈りという宗教的行動によって、また、祈りと深く結びつく日時、場所、服装、道具などによって、どのような意味が、どこに、どの程度伝えられているのか、あるいは伝えられていないのか。

特に、宗教が古い歴史を持っていて、いくつかの理由によって、その固有の土地を離れて別の異なる社会に移動し定着した場合に、祈りの内容や形態はどのような姿をとるのか。小論が明らかにしたい問題はここにある。

これまで、祈りについては、マヤ・ユカテカのカトリックの祈りを材料として分析を行った。その結果と対比して、祈りの理解をさらに深めていくことも目的の一つである。³⁾

これらの問題と目的にもとづいて、小論が取り扱う祈りは、その形と内容がすでに久しい以前から決められている祈りである。人間が神を信じ、神と差し向かい、言葉の力によって望ましい世界や自分を知り、それらを成り立たせようとする祈りを分析していく。

したがって、個人の自由な祈りや、言葉なしで行われる祈りととらえることができる舞踏、供儀、布施のような行為は含まない。また、禅や神秘主義に見られるような型に入った修行も含まない。ここでは、言葉によって発せられるが、その形式と内容は祈り手の誰れかれを問わず一定で変わらない祈りだけが対象である。この方法をとることによって、祈りの行為と動機の面は弱められていくが、その面は、いつ、どのような時に祈るか、という問いを發し、その問いへの回答を分析することによって補われていくであろう。

小論は、共同の祈りも取り扱わない。祈りを個人の宗教行動という面にとらえていく。その場合に、個人によって、聖なるもの (sacred) が現実に存在することが信じられていることと、言葉によって発せられていることが重要となってくるが、ハイラー⁴⁾やジェイムズ⁵⁾が取り組んだような個人の祈りの内容分析は除かれる。形と内容が一定の型に決められている祈りだけを対象とするからである。

このような問題と目的と対象にもとづいているので、小論は、主として、次のような仮説を検証しつつ展開されていく。

- 1) その宗教において中心的と考えられている意味が、もっともわかりやすい形で伝えられていくであろう。
- 2) その宗教において中心的と考えられていない意味が、もっとも多く変容をこうむるであろう。
- 3) その宗教において中心的と考えられている意味を伝えている祈りが、それを信じる人たちの

生活のより多くの面に関わるであろう。

II 研究方法

研究対象は、インド西北沿岸地域グジャラート (Gujarat) 州ノウサリ (Navsari) に現存するゾロアスター教徒パーシー (Zoroastrian Parsis) である。パーシーは、7世紀以降に、陸路および海路インド西北沿岸地域に移動し、そこで新しい言語と文化に出会い、それらとの接触のなかで当地に定着したゾロアスター教徒である。古い歴史をもつゾロアスター教という宗教を、新しい土地で新しい言語 (Gujarati) を身につけながら、信じてつづけている集団である。

具体的な調査方法は、質問紙表 (別添資料参照) を使用しての面接法である。この方法をとる主な理由は、小論の問題と目的からして、サンプリングにもとづいて一定数のデータを集めることが望ましいこと、面接法をとらないと被験者が自身で調べたり尋ねたりして回答することが予想されること、である。

サンプリングは、ノウサリにおけるパーシーの二つの居住区域モタファリア (Motafalia 主として祭司系譜のパーシーが居住する) とルンスイクイ (Lunsikui 主として平信徒のパーシーが居住する) から、それぞれ年齢集団、男女の項目についてバランスを保つように行った。年齢集団は、質問紙表の内容が多岐におよぶこと、また、その内容の一部が若い年齢層が参加しにくい性質のものであることなどから、12-19、20-29、30-39、40-49、50-59、60以上にグルーピングした。それぞれのグループは、生徒および学生、結婚前社会人、既婚社会人家庭持ち (前半/中盤/後半)、退職した高齢者層と意味づけられている。

質問紙表は、グジャラート州ノウサリのパーシーの教育がグジャラーティ語によって行われてきた事実にもとづいて、グジャラーティ語によって書かれている。調査に先だってパイロットサーベイを行ったこと、また、あらゆる年齢層のパーシーの母語はグジャラーティ語であるので、質問紙表の内容が分からないことは考えられない。さらに、質問紙表の原本が示すように、質問項目そのものも簡単であり、かつ選択肢が大部分をしめているので、疑問の生まれる可能性はきわめて少ないと考えられる。

調査は、信頼できる調査協力者 (パーシー) 二人と筆者が、被験者一人ひとりに個別に直接対面し、その場で質問紙表に回答してもらう方法によって行われた。調査期間は2004年8月10日から同年9月15日である。収集データは、300ケースであった。

III 結果と考察

1 全体の概要

宗教行動としての祈りは、ハイラー⁶⁾ や棚次⁷⁾ が指摘するように、それが聖なるもの

(sacred) に向けられていること、そこでは言葉が中心的な役割をはたしていること、という二つの角度からとらえることができる。ゾロアスター教においては、聖なるものは、人格をそなえたアフラ・マズダー (Ahura Mazda) やアンラ・マンユ (Angra Mainyu) であったり、預言者ゾロアスター (あるいはザラツーフ・シュトラ Zarathushtra) であったり、アフラ・マズダーの子と表される聖なる火 (Atash) などである。

ゾロアスター教徒パーシーは、言葉によって、これらの聖なるものと懇願 (～たまえ)、誓願 (～することを誓います)、讃美 (～でおわします)、祝福 (～であれ)、告白 (～を悔いてこれから遠ざけます) などを内容とするコミュニケーションを成り立たせる。

パーシーの祈りは、一般の人々が日々の生活の中で祈るものと、祭司が儀礼のために祈るものとに分けられるが、ここでは紙数の都合で、前者にかぎって論を進めていく。

1) ゾロアスター教徒パーシーの祈り

(1) 小さな義務の祈り

パーシーの日々の祈りは、すべて音に出して、言葉で発せられる。バージ (baj) という祈りが、声を抑えて唱えられるが、明確な意味をもった言葉によって成り立っている。⁸⁾

日々の祈りは、毎日欠かさずに一度は唱えることが義務とされている祈り (小さな義務の祈り nani Faraziad)⁹⁾ と、毎日唱えた方が望ましいとされている祈り (大きな義務の祈り moti Faraziad)¹⁰⁾ からなっている。

「小さな義務の祈り」は、パーシーが神に対して何か行動するとき、その最初の部分に義務づけられている祈りである。それらを順に示すと、(1)クスティ (kusti) (2)101の神名(Dadar Ahura Mazdana 101 Nam)(3)サローシュ・バージ (Srosh baj) (4)ゲー (gah) である。クスティは、ケム・ナ・マズダー (Kem na Mazda)、アフラ・マズダー・コダーイ (Ahura Mazda Khodae)、ジャシャ・メ・アワンゲー・マズダー (Jasa me avanghe Mazda) からなっている。クスティの祈りの眼目は、まずアフラ・マズダーの助けを請い、アーリマン (Ahriman)¹¹⁾ やドゥルジ (druj)¹²⁾ をはじめとするさまざまな悪から自分を守る決意を表明することである。

(2) 特別に重要な祈り

さらにパーシーは、これらの祈りと区別して、非常に重要な意味づけをしている祈りを唱えている。それらは、アフナワール (ahunavar)、アシュム・ヴォフー (ashem vohu)、イエンゲー・ハータム (yenghe hatam) であり、ゾロアスター教徒パーシーが必ず身につけなければならない祈りである。

①アフナワール (ahunavar) の祈り

アフナワール (ahunavar) の祈りは、ゾロアスター教徒に最初に教えられるべき祈りである。ゾロアスター自身によって作られた祈りとされている。

祈りの内容は、概して、次のとおりである。

「アフラ・マズダーが最高の神であられるように（教え人として望ましいように）、ザラトゥシュトラは裁き人として、アシャにしたがって、『善きところざし』によってなされたこの世での行いを、マズダーのもとに持ちきたらし、この世の王国をアフラのもとに持ちきたらす。かれら（アフラ・マズダーとアシャと『善きところざし』）は、このザラトゥシュトラを貧しい人たちの牧羊者となした。」¹³⁾

ゾロアスター教のほとんど全ての祈りが、この祈りを一度は含んでいる。キリスト教の主の祈り（paternoster）にあたると言ってよい。仮に、ゾロアスター教徒が他の祈りを知らない場合にでも、この祈りを決められた回数唱えることによって、その祈りを唱えたのと同じ効果を与えることができると考えられている。¹⁴⁾

②アシム・ヴォフー（ashem vohu）の祈り

アシム・ヴォフー（ashem vohu）の祈りは、アフナワールの次に重要であると位置づけられている。アフナワールの次に教えられなければならない。この祈りは、ゾロアスター教において重要な意味をもっているアシャ（Asha）を讃える祈りである。

アシャはゾロアスター教の教えの中で重要なものの一つである。正義（righteousness）、秩序（order）、理法（law）などと訳されて、精神的なものであれ物質的なものであれ、すべてのものを最も望ましい形に成り立たせている原理を言い表している。これを讃えることはアフラ・マズダーを讃えることに等しい。¹⁵⁾

「アシャは善いこと、最も善いこと。アシャは自ずから望むままにあり、アシャは自ずから望むままにあって私たちのためにある。アシャは最も善きアシャのためにありますように。」¹⁶⁾

この祈りは、特に、食事の前後、眠りに就くとき、眠りから覚めて起きるとき、自分の死に際してなどの場面で唱えると、他の場合よりもはるかに多くの効果を与えることができるとされている。¹⁷⁾

③イェンゲー・ハータム（yenghe hatam）の祈り

イェンゲー・ハータム（yenghe hatam）は、ゾロアスター教において、三番目に重要な祈りとされている。ほとんど全ての祈りがこの祈りを一部に含んでいる。

「この世にあるもののうちで、どの男たちを崇め敬えば、そこに最も望ましいことがアシャに

したがってあるか（祈りや供え物を捧げられるべきよりよき人たちであるか）を、アフラ・マズダーはアシャにもとづいて知っておられる。どの女たを崇め敬えば、そこに最も望ましいことがアシャにしたがってあるか（祈りや供え物を捧げられるべきよりよき人であるか）をも、アフラ・マズダーはアシャにもとづいて知っておられる。そのような男たちや女たちを私たちは崇め敬うものです。」¹⁸⁾

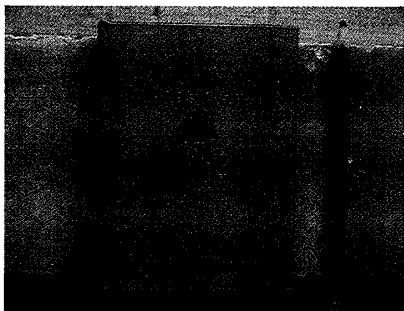


写真1
コルダ・アヴェスタ（祈禱書）



写真2
第三等級の聖なる火の前での祈り

2) 特に重要とされている祈りは、日々の祈りの全体の中で、どのように祈られているか。

では、ゾロアスター教徒の日々の生活の中で、これらの重要な祈りはどのように祈られているのだろうか。

一つの見方としては、ゾロアスター教の意味づけの大きさにしたがって、これらの三つの特別に重要な祈り、「小さな義務の祈り」、「大きな義務の祈り」の順に祈る頻度が高いこと、また、特別に重要な祈りは彼らの生活のさまざまな面で祈られていること、が予想される。

調査結果は、上に述べた予想に近い内容を示している。アシェム・ウォフー（99%）、ヤター・アフー・ワイリョー（99%）、ケム・ナ・マズダー（94%）、アフラ・マズダー・コダーイ（91%）、マズダー・ヤスノ・アフミ（89%）などのより重要とされている祈りが、それぞれ（ ）に示した程度で毎日祈られ、その他の祈りの程度を上回っている。

それらの祈りに次いで、ナマスカール・チャール・ディシャーノ（29%）、ナマスカール・チャー・ディシャーノ（29%）、コルシェド・ニアエーシュ（27%）、アータシュ・ニアエーシュ（27%）、メヘール・ニアエーシュ（25%）、マー・ボクタール・ニアエーシュ（24%）などの「大きな義務の祈り」が、それぞれ（ ）に示した程度でつづいている。太陽、月、水への祈りの頻度が高いことは、アフラ・マズダーの創造（つまり、アフラ・マズダーは、空、水、大地、植物、動物、人間、火《太陽はその一部》の順に創造を行った）についての教えと結びついていると考えられる。

3) 特に重要とされている祈りの意味は、どの程度理解されているのか。

(1) アフナワール、アシェム・ウォフー、ケム・ナ・マズダーの祈り

この問題を明らかにするために、アフナワール、アシェム・ウォフー、ケム・ナ・マズダーの

祈りを取り上げ、それらの一言一句が祈り手にどの程度とらえられているかを調べた。(質問紙表 質問3 参照) ケム・ナ・マズダーの祈りをここで取り上げた理由は、この祈りがゾロアスター教徒の信仰告白にあたるからである。この祈りは、小さな義務の祈りの一部をなしている。

「おお、マズダーよ、悪をおこなうものが私をとらえて害をおよぼそうとしているときに、あなたはあなたの火と『善きところざし』の他にどなたを私のための守護者にしてくださったのですか。あなたの火と『善きところざし』の働きによって、アシャはより優れたものになっていくのですが、そのような守護者としてどなたを私のようなものために定めてくださったのですか。おお、アフラ、わたしが知らなければならないことを、わたしの良心 (daena-) に説きかせてください。」¹⁹⁾

これが、その祈りの大筋である。ケム・ナ・マズダー (Kem na Mazda) は、アフラ・マズダー・コダーイ (Ahura Mazda Khodae)、ジャシャ・メ・アワンゲー・マズダー (Jasa me avanghe Mazda) とともに、小さな義務の祈りの最初の部分をなしているクスティの一部である。この祈りの眼目は、まずアフラ・マズダーの助けを請い、アーリマン (Ahriman) やドゥルジ (druj)をはじめとするさまざまな悪から自分を守る決意を表明することである。

では、ゾロアスター教において長い間特別に重要と考えられてきているこれらの祈りの意味は、どの程度理解されているのだろうか。そのことを明らかにするために、それらの祈りの文言をすべて示し、「これらの祈りの文言について、その意味を知っている箇所に下線部を引き、知っている意味を簡潔に書いてください。」と質問をした。

結果は、予想を大幅に下回って、ほとんど誰もその意味を知らない。一般のパーシーだけでなく、祭司も知らない。祭司のなかでも、特別な資格をそなえて聖なる火に香木を加える祭司も知らない。死者のための儀礼を少しも間違わずに 10 日間やりとおすことができる祭司も知らない。それらの祭司の妻も知らない。パーシーのことは何でも知っていると同評価されている高齢者も知らない。若い世代も中年も高齢者も知らない。男も女も知らない。職業に関係なく、誰もその意味を知らないのである。

この事実については、後にふれることにしよう。

(2) 特に重要とされている祈りの文言

さらに、上記の問題を明らかにするために、祈りの中でも特に重要とされている文言にしぼって、その意味の理解度を取り出そうとした。(質問紙表 質問4を参照)

それらは、1「アフラ・マズダーの子である聖なる火」2「アフラ・マズダーの慶びのために」3「上述のイェンゲー・ハータームの祈りの文言(ここでは省略)」4「思い、言葉、行い」5「善き思い、善き言葉、善き行い」である。

これらの言い回しは、多くの祈りの中に使われており、聖なる火、アフラ・マズダーの慶び、アシャはゾロアスター教において最も重要と考えられている。また、善を目標とする道徳的な指針を言い表した「思い、言葉、行い」についての文言も、祈りの中でしばしば出てくるだけでなく、パーシーのいろいろな冊子や広報の一部にキーワードとして使用されている。

この項目に関しては、4と5が、それぞれ(36%) (29%)の数値を示している。1、2、3は、それぞれ(18%) (20%) (6%)と低い。4と5の数値が高い理由の一つとしては、それらがゾロアスター教およびパーシー関係の広報や冊子に使われることが多いこと、それらが短くて韻をふんでいることなどが考えられる。しかし、短いという点では、また非常に重要なキーワードとしては、1も2も同じである。

4) 特に重要とされている祈りは、どのような場面で祈られているか。

特に重要とされている祈りは、それを唱える人々の現実の生活のあらゆる面にわたっているであろうという仮説にもとづいて、祈りが唱えられる具体的な場面を聞き取った。

特に重要な祈りであるアシェム・ウォフーとヤター・アフー・ワイリョーは、何か新しいことにとりかかるとき(新しい仕事を始めるとき、旅に出かけるときなど)と、病気になったり体調をこわしたときに祈られている。前者については、誰かの死に際して、後者については、平素の仕事に出かけるときに祈られる頻度が高くなっている。アシェム・ウォフーについては、すでに述べたように、死の場面で唱えられると、その効果は他の場合よりもさらに大きくなると考えられているが、その事実に沿う結果である。

また、10代の年齢グループに著しく高い割合として得られた結果は、身近な問題、しかも困難にぶつかったとき(川を渡るとき、罪を悔いるとき、お金に困ったとき、誰かと関係がうまくいかなかったときなど)にそれらの祈りが唱えられていることである。

「小さな義務の祈り」は、日々の生活の決まりきった場面で唱えられる割合が高いが、それらを数値の高い順に示すと、沐浴のとき(95%)、朝起きたとき(55%)、眠りに就くとき(49%)、祈りのとき(41%)となる。食事のときの数値が(14%)と低いことは、予想に反する結果である。アシェム・ウォフーは、すでに述べたように、教えの中では、食事の前後に唱えられるべき祈りなのである。20世紀の初頭までは、用便のとき、ゲー(一日を5つに分けた刻限)にも高い頻度で祈られていたのであるが、上に述べた結果は最近に起こった変化の一つであろう。

このように、パーシーは、重要な意味は理解できていなくても、どのような機会にそれを唱えるべきかは、知っているのである。したがって、祈りの一語一語の意味は伝えられていなくても、祈りの全体の大まかな意味とそれを唱えるべき機会は教えられ、伝えられてきているといえる。

5) 聖なる火に対して何を祈るか。

最後に、ゾロアスター教徒パーシーにおいて最も重要とされている聖なる火への祈りは、現実の生活のどのような場面において唱えられるのかを調べた。

ゾロアスター教徒パーシーは、三つの等級の異なる聖なる火をそれぞれ別々の聖火殿に片時も絶やさず燃やし続けてきている。祈りという視点からとらえたとき、等級の異なる聖なる火への態度に違いがあるのかを取り出そうとした。

最も等級の高い聖なる火（アータシュ・ベーラム）とその次に等級の高い聖なる火（アータシュ・アダーラーン）に対しては、喜ばしい機会、たとえば、新年（95%）、自分の誕生日（85%）、家族の者の誕生日（85%）、3月21日の新年（Jamshedji Nawroz）（50%）、ゾロアスターの誕生日（42%）に出かけて祈っている。後者については、家族の者の命日、死者の供養の日（Muktad）、1年の最後の5日間（Gatha）の機会にも祈る点が、前者と違っている。

聖なる火への祈りは、不幸や不振のとき（家族の者や知り合いが死んだとき、あるいは彼らが病気になったり体調をこわしたりしたときなど）に祈られる割合は高くない。

最後に、最も等級の高い聖なる火に対して、パーシーは特にどのような場合に祈るのか、を明らかにするために、「どのような機会に、マーチ（聖なる火に香木を捧げて祈ること）を行いますか。」「その場合、マーチにはどれくらい香木を捧げるかを書いてください。」と質問した。

マーチは、喜ばしい機会とそうではない機会とに行われている。家族の者が死んだとき（30%）、仕事がうまくいったとき（29%）、自分の誕生日（26%）、家族の者の誕生日（21%）、家族の者の命日（20%）、困ったことが起こったとき（15%）、子供が誕生したとき（14%）などが主な機会である。

新年には、最も等級の高い火を祀る聖火殿に出かけるが、マーチはしないことがわかる。また、マーチは自分と家族に関するにかぎられていて、知人まで含めた関心の広がりも低い。

ここでも調査の結果がその一部を示すように、パーシーは、家での日々の祈りの場合と同じく、どのような機会に聖なる火を前にして祈るか、あるいはまた、聖なる火に香木を捧げて祈るかは、知っているのである。

2 二三の問題

- 1) その宗教において中心的と考えられている意味が、もっともわかりやすい形で伝えられていくであろう。
- 2) その宗教において中心的と考えられていない意味が、もっとも多く変容をこうむるであろう。

これは小論を展開していくときの仮説であった。これにもとづけば、特別に重要な祈りとされているアフナワール、アシェム・ウォフー、イエンゲー・ハータームの祈りや、ゾロアスターの信仰告白であるケム・ナ・マズダーの祈りの内容をゾロアスター教徒パーシーがどのように理解

し、どのようにその意味を伝え、またどの意味を変容させているかが検討されるはずであった。しかし、質問紙表による調査の結果は、すでに述べたように、予想に反して、ゾロアスター教徒にとって特別に重要と考えられてきている祈りの意味が、それらをとこなえる人々によってほとんど理解されていないことを明らかにした。

なぜ、ゾロアスター教徒で最も重要であると考えられている祈りの意味が、ほとんどといってよいほど身につけられておらず、かつ伝えられていないのか。

調査結果が明確に示しているように、パーシーは、アシム・ウォフー、ヤター・アフー・ワイリョー、ケム・ナ・マズダーの祈りを頻繁に唱えているが、その意味をまったく理解していない。パーシーは、音でアヴェスターを身につけているが、その意味は身につけていないのである。上記の祈りを含む祈祷書は、『コルダ・アヴェスター』(Khordha Avesta 小さいアヴェスター)と呼ばれて、ノウサリのほとんどのパーシーが家に持っている。その中味は、アヴェスターの音がグジャラーティ語に書き換えられているだけであり、アヴェスター語の祈りの意味の説明は一カ所もない。パーシーは意味のわからない祈りを唱えつづけてきているのである。

しかし、パーシーは、それらの意味のわからない祈りを何のためにとこなえるのかは、ある程度知っている。最も等級の高いとされる聖火をたもっている聖火殿 (Atash Beheram) やその火よりは等級の低い聖火をたもつ聖火殿 (Agiary) に出かけて祈ること、信仰告白における祈り、死に関係するいくつかの場面で祈ること、などがそのことの根拠である。

1) 言語の問題

では、なぜ、重要な祈りの意味が伝わっていないのか。

パーシーが母語となったグジャラーティ語に祈りの意味を翻訳し、グジャラーティ語によって祈りの意味を伝える努力を怠ったからである。

(1) その理由の一つは、特別に重要な祈りの大部分が、アヴェスター語で書かれていることである。ゾロアスターの教えの主な源は、『アヴェスター』(Avesta) と呼ばれる聖典である。しかし、この史料の正確な理解は難しい。

『アヴェスター』は、ガーサー・アヴェスター語 (Gathic Avestan GA_v.) と「後代」アヴェスター語 ('Younger' Avestan YA_v.) によって書かれている。ガーサー・アヴェスター語という名称は、ゾロアスター自身によって構成された『17のガーサー』(the 17 Gathas) が残っていることに因んでつけられた。

ガーサー (Gatha) の意味は、サンスクリット語においてと同じように、讃歌 (hymn) である。ゾロアスターの『ガーサー』は、短い韻文で書かれてあり、ゾロアスター自身がアフラ・マズダーに語りかける形をとっている。ゾロアスターの教えを知る上できわめて重要な史料である。しかし、アヴェスター語で書かれた『ガーサー』は、文法や統語法 (syntax) が複雑であること、古代イランの祭司によって書かれていることなどの理由で、その正確な意味をつかむことが

きわめて難しいのである。

パーシーが重要な祈りの意味をとらえていない理由は、ここに関係してくる。重要な意味を伝えている言葉そのものが、言語学の視点からして、難解なのである。

そこで、「後代」アヴェスターとパフラヴィー・ザンド (Pahlavi Zand 中世ペルシア語パフラヴィーで書かれたアヴェスターの解釈書) によって書かれた解釈と説明を手がかりにして、『ガーサー』に示唆されているゾロアスターの教えを理解していくことが重要になる。また、言語学的には姉妹にあたるリグヴェーダ (Rigveda) と、ゾロアスター教が現在も行っている儀礼や慣習も、『ガーサー』を正しく理解する上で欠かせない参考資料である。

しかし、パーシーにとっては、ここにもまた別の問題が待ちかまえている。つまり、中世ペルシア語で書かれた『ザンド』の正確な意味をつかむことが難しいのである。

『ザンド』(Zand) つまり解釈 ('interpretation') は、語彙、注釈、翻訳によってアヴェスターに加えられた解釈を意味している。サーサーン朝は、中世ペルシア語パフラヴィーの使用を義務づけたので、中世ペルシア語で書かれた『ザンド』が全体をとどめる形で残り、それらが通例『ザンド』('the' Zand) と呼ばれている。この文献は、すでに述べたように、『ガーサー』に示唆されているゾロアスターの教えを理解していく上で、不可欠なのであるが、言語学の視点から、その正確な内容をとらえることが非常に難しいのである。なぜなら、中世ペルシア語は、文法がきわめて簡単のために、かえって意味の曖昧さを生み出すからである。また、その文字の筆記が難しく、正確な意味を表すにはあまりにも数が少なすぎる。さらに、死後となっているアラム語表意文字も使うので、この点でも難しさと曖昧さが強まるからである。パフラヴィー文献の大部分が、もともと口頭伝承であったものを書き残しているという点も、その難解さの一因である。パフラヴィー文献は口頭伝承の性質を強くそなえているので、匿名で書き残されてきている。編集にあたるものが自由につけ加え、改訂していくので、パフラヴィー文献の成立を特定することが難しいだけでなく、古代から中世までをカバーするその内容を正確に解明することは容易ではないのである。

(2) 第二の理由は、『アヴェスター』の史料としての性質から来る。つまり、『アヴェスター』は、その全体の約四分の一しか残っていないのである。

サーサーン朝時代に、5世紀から6世紀にかけて、アヴェスター史料は法典となって21の本 (nasks) となった。これを『大アヴェスター』という。しかし、イスラーム統治下において、聖火殿が壊され、その後、アラブ、トルコ、モンゴルに支配されたために、『大アヴェスター』の内容をすべて含んだ写本は一つとして残っていない。その全体像はパフラヴィー語で書かれた『デーンカルド』(Denkard 'Acts of the Religion') の詳しい概要から知ることができるが、この史料によると、『アヴェスター』は全体の約四分の一だけが残っていることがわかる。この意味でも、パーシーは『アヴェスター』の内容を理解することが難しい立場に立たされてきたの

である。

(3) 第三の理由は、パーシーがグジャラーティ語を母語とする宗教教育を十分に行わなかったことである。

上に述べたような言語学的な事情を背景にして、イランのゾロアスター教徒は、9世紀頃から、インドの西北沿岸地域グジャラートに移動し、新しい文化と社会に出会い、それらと接触しながら定着していった。その過程で、彼らはパーシー (Parsi) と呼ばれるようになり、長い時間をかけて、自分たちの母語をイランの中世ペルシア語からインドのグジャラーティ語に替えていった。パーシーは、インド社会への移動と定着の過程で、かれらの文化の中心を形づくっているゾロアスター教の教えと慣習を理解し、それらを営みつづけることを忘れなかった。

12世紀の後半か13世紀の初頭になると、学識ある祭司が、中世ペルシア語で書かれていたアヴェスター史料 (これを中世ペルシア語ザンド Middle Persian Zand という) をサンスクリット語 (Sanskrit) と古代グジャラーティ語 (Old Gujarati) に翻訳し始めた。パーシーは、グジャラーティ語によって、『アヴェスター』に書かれてある内容を理解しようとしたのである。この新しい動きにともなって、15世紀から18世紀にかけて、イランのゾロアスター教祭司とインドのゾロアスター教徒パーシーの祭司の間で、儀礼や慣習をめぐるやりとりがかわされるようになった。パーシーの質問に対するイランの祭司の回答は、『パーシャン・リヴァーヤト』 (Persian Rivayats) となって結実し、特に、清浄についての規定とその運用に関して、パーシーの信仰に重要な影響を与えてきている。

言語学的には姉妹にあたるリグヴェーダ (Rigveda) と対比しながら、また、その当時のイランのゾロアスター教徒が行っていた儀礼や慣習を重要な手がかりにしながら、インドのパーシーは『ガーサー』を含む『アヴェスター』が伝えるゾロアスター教の教えを正しく理解し、それらを営もうとしたのである。

19世紀の中葉からは、パーシーはグジャラーティ語と英語によって、ゾロアスター教の教えや慣習に関するかなりの量の文献を書き残すようになった。さらに、19世紀から20世紀になると、パーシーの祭司たちがグジャラーティ語と英語で、宗教儀礼についての詳しい説明を書き始めた。

ではなぜ、困難な言語学的な状況を超えてパーシーが取り組んだこのような努力にもかかわらず、特別に重要な祈りの意味がほとんど伝わらなかったのか。

パーシーがグジャラーティ語を母語とする宗教教育を十分に行わなかったことがその一因と考えられる。このことの一部は、パーシーの使っている祈りの書の性質に分かりやすく現れている。

アヴェスター語、パフラヴィー語、ペルシア語などを母語として生活をしていたパーシーは、インド西北沿岸地域に移動し定着することによって、長い時間をかけてグジャラーティ語を母語とするコミュニティを築き上げた。したがって、理想的には、グジャラーティ語を母語にしてい

く過程で、宗教的意味も現地語のグジャラーティ語を使って伝えられることが最も望ましかったのである。あるいは、グジャラーティ語は生活のための言語としておいて、一方で伝来の言語（アヴェスター語、パフラヴィー語、ペルシア語）による宗教教育が行われることも考えられた。しかし、パーシーにおいては、この努力、つまり、コミュニティの中において母語による宗教教育が十分に行われなかったのである。

ノウサリにおいて、聖火殿においても家庭においても、祈りの意味について教育が行われることはない。また、聖火殿の中には、キリスト教に見られるような聖像や聖画が置かれて、文字の読み書きができない人たちへの配慮も含めて、教えの理解や伝達に結びついていることもない。あるいは、一定の区域ごとに、キリスト教やその他の宗教に見られるように、そうした教育を引き受けている家族も存在していない。

ほとんどすべてのパーシーは、『コルダ・アヴェスター』と呼ばれている祈りの書をもっている。(写真1 参照)『コルダ・アヴェスター』(Khorda Avesta 文字どおりには『小アヴェスター』の意)は、その名称も一部を言い表しているように、『アヴェスター』の中味をいろいろな箇所から引き抜いてきて構成した祈禱書である。それらには中世ペルシア語の文献の一部も組み込まれている。すべての『コルダ・アヴェスター』は、ゾロアスター教徒が日々唱えなければならない祈りを含んでおり、時にはその編集内容とヤシュトの抜粋について多少の違いが見受けられるものの、すべてのゾロアスター教徒に共通する祈禱書である。

しかし、『コルダ・アヴェスター』の内容は、特に祭司がゾロアスター教に不可欠の祭礼を行うときに必須とされている重要な祈りの一部を集めてきているものである。その結果、内容が祭礼に関係するものに偏り、また、その抽象度が高く、祭司ではない一般のゾロアスター教徒の現実の生活に結びつく度合いは低い。『聖書』や『クルアーン』のように、現実の生活のさまざまな面についての指針を具体的に指し示したり、教え諭したりする性質をもたないのである。しいてその面を探すとすれば、農業に関係することがらとそれらに結びついた祝祭や死や死体についての内容である。とは言え、その場合でも内容が法の規定のように事務的に細かく示されていて、その意味をわかりやすく伝えるために『聖書』のようにたとえ話 (parable) を引用することもなされていない。

さらに、パーシーの『コルダ・アヴェスター』は、すべてグジャラーティ語で書かれているが、その中味は、『コルダ・アヴェスター』の原本の文言を、グジャラーティ語の音に書き換えているだけである。祭司でないパーシーは、19世紀から『コルダ・アヴェスター』を思いだした。それ以前は、すべての祈りを家の祭司か親から習って暗記して覚えていたのである。

2) 布教と改宗の禁止の問題

すでに指摘してきたことだが、パーシーは、パーシーの父親とパーシーの母親から生まれ、ゾロアスター教の信仰告白をした者だけをパーシーのメンバーシップとして認めている。この条件

をみたさない者を、彼らはパーシーとして社会的に受け入れない。つまり、パーシーに関係する社会的な制度の恩恵にあずかる権利を彼らに認めないのである。このことを言い換えると、パーシーは宗教内婚によってゾロアスター教を保ってきているということである。

また、パーシーは、他のコミュニティに属している人々をゾロアスター教徒パーシーとして受け入れることもしない。²⁰⁾ この事実は、宗教にそなわる一般的な特性の一つである伝道にさからう一面である。

宗教は、たとえば、すでに述べた究極的な関心に応える営みという点からも、個人や集団を超えて広がっていく性質をそなえている。究極的な問題に応える営みという視点から神を自覚した人間がとる一つの行動は、神と人間との間で引き起こされた出来事、つまり宗教体験に突き動かされて、それらを意味のあることとして語り伝えようとするものである。ある場合には、それぞれが理想とする自分になるためのモデルとして、また、ある場合には、この世のあり方の立て直しのためのモデルとして。それらの体験とそれによって引き起こされた共感が、人々の間で分かち合われるかぎりにおいて、宗教は人間の心をつき動かしていくのである。宗教にそなわるこの性質が行動となって現れたのが伝道である。

伝道は、この意味で、開かれた人間の考え方とふるまい方であり、それは個人と集団を超えて、さらに地域を越えて広がっていく性質をもっている。この性質にもとづいて、伝道は言語による宗教の理解を非常に重要な前提とするのである。誰かに伝えるにあたいするという内容は、まず、言葉によってそれが理解され、それが分かりやすい形で言葉で言い表されなければならない。宗教が教育に力を注ぐ理由はここにある。

しかし、パーシーは伝道および布教を行わないから、宗教的意味を大量に含んでいる祈りの意味を知る必要がない。伝道や布教のためには、祈りの意味を知り、それを知らない人たちに伝え、その良さを分かってもらわなくてはならない。自分が意味を知らないこと、その意味にもとづいてそのことの意義を納得していないことは、伝道や布教には不適切である。

ゾロアスター教徒パーシーにおいては、なぜ、キリスト教やイスラーム教と同じように、伝道が行われなかったのか。また、その伝道と結びつきの深い宗教教育が日常的に組織立てて行われてこなかったのか。

3) 宗教教育の問題

なぜ、パーシーにおいては宗教教育が十分に行われなかったのか、という問題は、いろいろな角度から検討されるべきである。ここでは、パーシーの集団内における祭司の役割とその社会経済的な利害という点から論じていきたい。

パーシーは次のような伝統をもっていたにもかかわらず、したがって、意欲と同意さえあれば、十分にそれを行う可能性を秘めていたにもかかわらず、集団内の宗教教育を行わなかった。つまり、中世ペルシア語で書かれた『アヴェスター』の解釈書が存在したことである。

残っているすべての『アヴェスター』史料は、『ヤシュト』を除いて、それぞれの『ザンド』をもっている。『アヴェスター』の内容は、たとえ残っているものが全体の約四分の一であるにしても、残っている史料の解釈、注釈は書き残されてきているし、また、今日では残っていない分についても、大きな制約はあるものの、中世のペルシア語によって解釈と注釈が書き残されてきているのである。

後者に関係する重要な文献の一つは、パフラヴィー語で書き残された『ブンダヒシュン』(Bundahishun Bd.'Creation')で、創造だけでなく、神々の性格や終末論的な考え方も取り扱っている。『イラン・ブンダヒシュン』または『大ブンダヒシュン』(Iranian or Greater Bundahishn)と『インド・ブンダヒシュン』(Indian Bundahishn)の二部からなっており、「『ザンド』から得られる知識」(Zand-Agahih, 'knowledge from the Zand')という副題がついている。

また、「(『ザンド』からの)抜粋」(Wizidagiha, 'Selection [from the Zand]')は、ペルシアの祭司ザートスプラム(Zadspram)によって、9世紀に編集され、預言者ゾロアスターの生き方についての資料を含んでいる。

さらに、ゾロアスターの生き方についての詳しい内容は、『デーンカルド』(Denkard Dk.)にも書き残されている。『デーンカルド』は、宗教法('Acts of the Religion')の意味で、9世紀から10世紀にかけて書かれたさまざまな資料を大量に編集したものである。

このように、紛失した『アヴェスター』史料の『ザンド』という貴重な史料を、残っている『アヴェスター』史料の『ザンド』と比較することによって、翻訳と意識ならびに翻訳と注釈とをかなり正確に区別することができるので、紛失している『アヴェスター』の内容を知ることができるのである。

ゾロアスター教徒パーシーは、すでに述べたように、言語学的な意味で大きな制約はあるものの、ゾロアスター教の教えを理解し、それを伝えることに関して、このような伝統を保っていた。『ザンド・アヴェスター』(『アヴェスター』と『ザンド』が併記してある文献)を見ると、祭司が、まず『アヴェスター』をできるだけ字句どおりに訳出し、次に中世ペルシア語で意味の分かりやすい訳を試み、最後に説明、注釈を加えている。

こうした『ザンド』は、その制約を認めさえすれば、宗教教育を行う上での条件の一部はみたしているのである。また、すでに述べたように、19世紀の中葉からは、パーシーはグジャラーティ語と英語によって、ゾロアスター教の教えや慣習に関するかなりの量の文献を書き残すようになった。さらに、19世紀から20世紀になると、パーシーの祭司たちがグジャラーティ語と英語で、宗教儀礼についての詳しい説明を書き始めたのである。

にも関わらずパーシーのなかで宗教教育およびそれと深く結びつく伝道が十分に行われなかった理由の一つは、祭司が宗教的な知識を独占していった、その知識を自分たちの社会的および経

済的な利害の手段としたからである。

その結果、宗教的な知識に関して、パーシーは一方に祭司、他方に一般の人々というように二極化した。つまり、一方の極では、祭司が宗教的な知識とそれにもとづく儀礼の技術を獲得し、それを彼らの階級としての経済的自立と政治的影響力をたもつための手段としていった。²¹⁾ もう一方の極では、一般の人々が宗教的な知識を身につける機会を失うとともに、それらの知識を祭司に委託する傾向を強めていき、その結果として宗教的な知識への無関心の度合いを高めていったのである。この意味で、それぞれの極はもう一方の極をその進展になくしてはならない前提にして、宗教的な知識に関する両者の間の距離を大きくしていったのである。

この両極は、ヒンドゥー社会に移動してきたパーシーが、イギリスのインド統治を一つの契機として、生活の重心を農業から商工業ならびにサービス業に移しかえて²²⁾、西北部のスーラト (Surat) やナウサリからさらに南の (ボンベイ改め) ムンバイにその社会経済的な影響を確立していく過程で一段と分極化していったのである。

同じ神を信じ合う宗教集団の中において、神との出会いの体験やそれへの共感が分かち合われることがなければ、どのようにして、伝道が生まれてくるであろう。神を知る手段が一部の者にかぎられ、その者たちがその手段を独占し、信仰の仲間にさえ教えようとし、つまり inner mission がおこなわれない二重に閉じた集団に、そもそもどのような宗教体験がうまれるというのか。アフラ・マズダーを中心とする神に関する知識は、信仰を同じくする仲間に教えられない。そして、それらの意味は、ゾロアスター教徒以外の人々には知らせない方がよい。これが、パーシーの信仰に対する基本的な姿勢である。宗教内婚の繰り返しは、この姿勢をさらに強めていく一方で、宗教教育を行う必要を弱めていったのである。

IV 結びにかえて—今後の課題と展望—

パーシーは、久しい以前からその形と内容が決められてきている祈りを、薬とその効用になぞらえて説明する。薬の能書きはいちいち誰にも分からないが、それを飲めば効く。同じように、祈りの一言一句の意味は分からなくても、それを唱えれば効く、という。祈りが呪文化している説明である。パーシーは、重要な祈りの意味はほとんど理解できていなくても、どのような機会にそれを唱えるべきかは、知っているのである。したがって、祈りの一語一語の意味は伝えられていなくても、祈りの全体の大まかな意味とそれを唱えるべき機会は教えられ、伝えられてきているといえる。このことは、特別に重要な祈りを唱える場面だけでなく、聖なる火を前にしての祈りの調査によっても根拠づけられた。

パーシーの祈り、つまり小論があつかった定型の祈りは、ゾロアスター教の祈りの古いものをそのまま保っているのであるが、それを言い換えると、祭司が儀礼のときに唱える文言の中から選び出されたものを中心となって構成されている祈りである。

儀礼として今日まで伝えられ、毎日、祭司によって行われているヤスナの儀礼は、古い時代のゾロアスター教の教えの重要な部分を含んでいる。ヤスナは、小論が取り上げた祈りはすべて含んで成り立っている儀礼である。この儀礼で唱えられる祈りの意味を知っているパーシーは、小論の考察にもとづけば、ごく限られているであろう。

キリストやムハammadのように神の言葉を語り伝える形は、現代のパーシーには理解されていないし、それを理解させようとする努力もなされていないのである。

小論は、定型の祈りだけを取り扱った。しかし、祈りは、定型の祈りだけでなく、自由の祈りも含んで成り立っている。今後は、ゾロアスター教徒の自由の祈りを材料にして、祈りの考察を深めていきたい。また、小論では、三つ目の仮説、つまり、3) その宗教において中心的と考えられている意味を伝えている祈りが、それを信じる人たちの生活のより多くの面に関わるであろう、に関する分析が不十分である。この仮説にかかわる分析は、稿をあらためて、不安や悩みなどに関する調査結果とあわせて試みる予定である。

注

1) 拙論 2000 「時間および空間感覚研究序論」『宮崎公立大学人文学部紀要』第7巻第1号 pp.87-103 参照。

2) Paul Tillich 1957 Dynamics of Faith N.Y.Harper pp.1-9 谷口美智雄訳 1961 『信仰の本質と動態』岸本英夫 1961 『宗教学』 大明堂 pp.17-33

3) 拙論 2000 「マヤユカテカの一カトリック村落マニにおける祭壇と聖像について」『西日本宗教学雑誌』第22号 pp.15-26

ユカタン州マニ村のマヤの人々の現実の生活においては、マヤの祈りとカトリックの祈りが意味をもち、前者は病気治しや雨乞いなどの呪術のための祈りとして、後者は神やイエスやマリアに対する祈りとして働いている。

家庭の祭壇においては、個々人の身近な問題が祈られ、教会においては個々人のレベルを超えた社会や世界の問題が祈りの内容に含まれている。また、家での祈りにおいては、マリアをはじめとしていろいろな聖像が具体的な姿として個々人の前に現れ、それらに人々は誓い(promesa)を立てて行動を起こすが、その結果の是非が健康と病気、仕事の振不振、事故などの原因と考えられている。つまり、祈りは、単に〜であれと言葉で発することにとどまっているのではなく、言葉で発したことを実行することであるという点が明らかにされたのである。マヤの人々の自由な祈りは、祈ることは行うことである、という性質をそなえている。

祈りという宗教行動は、このように、人々の実際の生活のさまざまな面に変化や立て直しや影響を及ぼしているのである。

- 4) ハイラー (Friedrich Heiler 1892-1967) は、『祈り』(Das Gebete München 1918 : Prayer, 2nded., Oxford University Press 1958.) において、宗教的な生命をとらえることができるのは祈りの分析をとおしてであって、宗教的な教えや制度や儀礼や倫理的理念の分析をとおしてではない、という立場をとる。

分析の方法は、宗教度の最も高い人物、つまり、預言者、伝道者、神秘主義者の祈りを材料として、それらの個人的な祈りを動機と内容という視点から心理学的な方法で分析することである。

棚次 正和 1998『宗教の根源—祈りの人間論序説—』 世界思想社 pp.27-48 参照。

- 5) William James 1902 The Varieties of Religious Experience. New York.

榊田 啓三郎 訳 1970『宗教的経験の諸相』岩波書店

ウィリアム・ジェイムズ (William James 1842-1910) は、宗教を個人の面にとらえ、回心、靈感、一般的な基準をはるかに超えた愛や純潔や自制、神秘的な意識などについて、具体的な事例にもとづく分析を行った。ジェイムズは、神に絶対的に依存していくというような情動を重視しない。

また、ハイラーと同じように、宗教的な教えや制度などよりも、個人の宗教体験 (religious experiences) にもとづいて生き生きと引き起こされてくる内容を重要と考えた。個人が、自分は神的と考えられているものと関係していると自覚しているときに生み出されてくる感情、行為、経験を考察していくのである。したがって、ジェイムズは祈りを重要な宗教体験と位置づけて、私たちの意識を超えた霊的な力が祈る人に流れ込んで、個人の心の内面にも、また、個人をとりまく現実の生活にも、効果を引き起こすことを示した。

ジェイムズは、宗教体験を考察するとき、意識を超えた領域の働きに大きな意味を与えている。この重要な指摘にもとづいて、すでにマヤのカトリックを対象としてTATならびに自由連想を方法として調査を行ったが、パーシーについても同様の視点から調査を行う予定である。

棚次 正和 前掲書 pp.214-216 : 221-222 参照。

- 6) 棚次は、『宗教の根源—祈りの人間論序説—』(1998 世界思想社) において、現象学の視座から祈りを問い直し、神、人間、この世とあの世、言葉を視点として、祈りの類型を打ち出している。

棚次は、祈りは、1) 神と交わり一つになること、2) この世と自分の関係の立て直し、3) 自分が理想とする自分になること、4) 言葉の力によって望ましい世界と自分を知り、それらを成り立たせる、の4つの方向のいずれかに向かうという。前掲書 pp.252-256 参照。

- 7) ハイラーは、神秘主義者の祈りと預言者的な信仰の祈りの特性を、この世と来世のとらえ方、神のとらえ方、罪と救いのとらえ方などの角度から取り出し、これらの祈りは二つの重要な類型をなしていることを提示した。

祈りの本質は、ハイラーによると、人格をそなえ生きているととらえられている神と、また、

現実に存在するものとして体験されている神と、その神を信じる人たちの間に引き起こされる生き生きとした交わり、である。同時に、その交わりは、社会関係のありようをも反映している。

8) バージ (baj) は、ヤザタ (yazata 神の使い)、フラワシ(fravashi 霊)などに対して発せられる言葉や祈りとともに、それらの場面で使われる供え物を言い表している。

パーシーの現実の生活においては、バージは1) 死者の命日、2) 聖なるパン (darun)、果物、卵 (または固形のバター)、3) 声を落として唱える祈り、4) 特定の祈り、と結びついている。

死者に対しては、1年間、毎月、死んだ日 (roj) にバージの儀礼が行われる。1月7日に死んだ場合は、2月7日、3月7日、……、12月7日とバージの儀礼が行われ、一年忌のバージの儀礼のあとは、命日だけにバージの儀礼が行われていく。「本日は、誰々の何回目のバージです。」という言い回しがされる。このバージの儀礼の中で、死者の名前が呼び上げられていく。

バージの儀礼の際に供えられる聖なるパン、果物、卵 (または固形のバター) や、それらの供え物を入れた容器もバージと呼ばれる。そこで、たまたま二人以上の命日が重なったときは、その人数分だけ別々に供え物と容器が用意され、それぞれ誰々のバージとよばれるのである。パーシーは、普通の声の大きさではなく、それを低く抑えて、口を開かず唱える祈りを行う。アヴェスター語の祈りの中に、パザンド語 (Pazand アヴェスター語で書かれたパフラヴィー語 Pahlavi) の祈りが入ってきた場面で、あるいは祈りの最中に何か別の用事を頼んだりするときには、バージでそれらを行わなければならない。

バージと呼ばれる特定の祈りには、(1) 供え物をして、特別の資格をもった祭司によって唱えられるものと、(2) 供え物をしないで、平信徒によっても唱えられるものがある。前者は、命日のバージの祈りを主とし、後者は、食前、用便の後、沐浴などの場面での祈りをさしている。

J.J.Modi., 1932 The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees
pp.333-353 参照。

9) 「小さな義務の祈り」は、(1)クスティ (kusti) (2)101の神名(Dadar Ahura Mazda 101 Nam)(3)サローシュ・バージ (Srosh baj) (4)ゲー (gah) である。

クスティは、ケム・ナ・マズダー (Kem na Mazda)、アフラ・マズダー・コダーイ (Ahura Mazda Khodae)、ジャシャ・メ・アワンゲー・マズダー (Jasa me avanghe Mazda) からなっている。クスティの祈りの眼目は、まずアフラ・マズダーの助けを請い、アーマン (Ahriman)やドゥルジ (druj) をはじめとするさまざまな悪から自分を守る決意を表明することである。それぞれの祈りの概要は次のとおりである。

1 ケム・ナ・マズダー (kem na Mazda) (クスティ)

ヤスナ (46章7節:44章16節:49章10節) とヴェンディダード (8章21節) の儀礼で唱えられる祈りの一部を集めたものである。その組み合わせは、ヤスナ46章7節+ヤスナ44章16節+ヴェンディダード8章21節+ヤスナ49章10節である。祈りの中味は本文で紹介している。

2 アフラ・マズダー・コダーイ (Ahura Mazda khodae) (クスティ)

これはパザンド語 (Pazand) による祈りである。アフラ・マズダーに助けを請うて、アーリマン、ダエヴァ、ドゥルジなどの悪から自分を守り、また、それらの悪と闘っていく決意を表明している。アーリマン、ダエヴァ、ドゥルジについてはそれぞれ注11) 注12) を参照。

3 ジャサメ・アーワンゲー・マズダー (jasame avanghe Mazda) (クスティ)

この祈りは、ゾロアスター教の信仰告白にあたる。ヤスナ12章9節から取ってこられている。この祈りの冒頭の4語、つまり、jasame avanghe Mazda、「おお、マズダー、私を助けに来たまえ。」は、ホルマズド・ヤシュトの儀礼から採用されている。マズダーを信じ、ザラツシュートラに従い、善きところざし (humata)、善き言葉づかい (hukuta)、善きふるまい (huvarushta) を行うことが誓われている。

4 ダダー・アフラ・マズダーナン・101・ナーメ (dadar Ahura Mazda 101 nam)

ヤスナの儀礼の中で、聖なる牛 (Varasyo) の毛をつけた銀の輪で水をふりかけるときに声をおとして (「バージで」)、101の神々の名前が唱えられる。ヤスナ、ガーサー、ヴェンディダード、ヤシュト、ヴィスペラドなどの儀礼のときに唱えられる神々の名前が挙げられている。

5 ディー・ノ・カラモ (din no kalamo)

これもゾロアスター教の信仰告白である。ヤスナ12章にあたる。私はダエヴァを討ち滅ぼす、という文言から始まって、マズダーを信じ、預言者ザラツシュートラに従い、アメシャ・スペンタ (Amesha Spenta 「滅びを知らない聖なるもの」、の意で、アフラ・マズダーの下に位置していて、その善き創造を助ける神々。) を信じることを表明する祈りである。

6 サローシュ・バージ (Sarosh baj)

Sarosh という語は、Sruつまり聴く (to hear, あるいは聴かせる to cause to hear) から来ていて、そこから従う (to obey) の意味が生まれてきた。

サローシュは、服従や従順 (obedience)、すなわち神への服従を司るヤザタ (yazata 信じるにあたいする存在で、アシャにしたがって生きる人たちが悪と闘うのを助ける) である。服従は聴くことを含んでいる。サローシュは神の言葉を聴き、それを人間に伝え、人間に神のメッセージに従うように導くヤザタである。キリスト教の天使ガブリエルに似た存在であり、ガブリエルと似た働きをする。サローシュは、神の望みと命令を人間に伝えるメッセンジャーである。預言者ゾロアスターが、また、アシャにしたがって生きる人々が、神によって魂を揺さぶられるのはサローシュをとおしてである。

サローシュは夜も昼も人間の魂を守る。特に、サローシュによる魂の守りは、夜に強力である。そこで、サローシュに捧げるヤシュトの儀礼（ヤシュト 11章とヤスナ 57章）は、夜に行われる。犬と鶏がサローシュの働きと結びつけられる動物である（Bundhishn XIX,33）。サローシュは、人間が活着しているときも、死んだ後も、その魂を守る（ヤスナ 57章 25節）人間の魂は、死後3日間この世にとどまり、四日目の朝に、この世の生き方の裁きをうけるためにチンワット（Chinvat）の橋に向かう。このとき魂が助けを求めるのもサローシュである。

祭司が儀礼を始めるに先だって、そのつどこのサローシュへの祈りを唱える。

7 ゲー (geh)

ゾロアスター教徒がに独特の時間感覚の一つである。一日を、(1) 日の出から真昼まで（ハーワン・ゲー Hawan gah）、(2) 真昼から午後の中頃まで（ラピスウィン・ゲー Rapithwin gah）、(3) 午後の中頃から日の入りまで（ウジリン・ゲー Uzerin gah）、(4) 日の入りから真夜中まで（アイウィスルスレム・ゲー Aiwisruthrem gah）、(5) 真夜中から日の出まで（ウシャヒン・ゲー Ushahin gah）に刻んで祈ったり、儀礼を行ったりしている。それぞれの刻限を守る神々への祈りを含んでいる。

10) 「大きな義務の祈り」とその概要は次のとおりである。

1 コルシェード・ニアエーシュ (Khorshed nyayesh)

ニアエーシュ (Nyayesh Ny.) は、太陽とミトラ（一日に3度、一緒に唱える）、月（一ヶ月に3度）、水、火に対する祈りである。これらの祈りは、ガーサーとヤシュトの一部を含んでおり、その後につけ加えられた内容も組み込まれている。

太陽への祈りである。ハーワン・ゲー、ラピスウィン・ゲー、ウジリン・ゲーに唱える。

2 メヘール・ニアエーシュ (Meher nyayesh)

ミトラへの祈りである。ハーワン・ゲー、ラピスウィン・ゲー、ウジリン・ゲーに唱える。

3 ドア・ナム・セターエーシュネ (doa nam setaeshne)

この祈りは、パザンド語で唱えられる。アフラ・マズダーのそなえているさまざまな属性と、アフラ・マズダーが神としてなしたすべての創造とを讃える祈りである。

4 ナマスカール・チャー・ディシャーノ (namaskar char dishano)

この祈りは、ドア・ナム・セターエーシュネの後につづけて唱える祈りである。ヤスナ 1章 16節から取ってこられている。チャー・ディシャーノとは、4つの方角の意味であるが、祈りの中味には、村、牧草地、家々、湖水、山々、大地、空、風、星、月、太陽などが具体的に含められている。

5 マー・ボクタール・ニアエーシュ (Mah bhokhatar nyayesh)

マー・ヤシュトの一部であり、月への祈りである。

6 アルドゥウィスラ・ニアエーシュ (Ardivisur nyayesh)

ドゥウィスラ (あるいはアーワン) ・ヤシュトの一部で、水への祈りである。

アルドゥウィスラは、古代イランの宇宙論において、イランの中央を流れていたとされる川の名前である。アルドゥウィスラは、つまり、水は、純粹で濁っておらず、悪に対抗し、すべてのものを治していく。生命の源であり、男と女の生殖を支え、子供の誕生を導き、その後の成長に必要な母乳を恵む。

7 アータシュ・ニアエーシュ (Atash nyayesh)

ヤスナ 22 章の一部で、火への祈りである。祈りのなかで火は、「アフラ・マズダーの子」として人格化され、供え物と祈りに値する存在とされている。火は、供え物をもってそれに近づく人には、生命、知恵、子孫、活動力、勇気などを恵む。

8 パテート (patet)

罪の告白とその悔い改めの祈りである。善きところさしにもとづかない考えや発言や行動を告白し、また、精神的なものであれ物質的なものであれ、考えや発言や行動についてなした罪を告白し、それらを悔い改めることをアフラ・マズダーに誓う。

9 ヤシュト (Yasht)

ヤシュトは、ゾロアスター教にあってアフラ・マズダーの下に位置している神々に捧げられる讃歌である。『ヤシュト』の一部は、『大ヤシュト』 ('great Yasht') と呼ばれて、インド・イラニアン時代 (少なくとも 2000 B.C. まで遡ることができる) の内容を、「後代」アヴェスター語で書き残している。しかし、『ガーサー』・テキストのように、正確には伝えられていない。『ガーサー』が正確に伝えられてきているのは、それがゾロアスター教にとって重要だからである。『ヤシュト』は、口頭で伝えられ、一部は記憶され、一部は新しく作り変えられて伝えられてきているので、その中のゾロアスターの教えは古い内容と新しい内容が織り交ぜられたものになっている。

11) アーリマン (Ahriman Pahlavi) は、アングラ・マインユ (Angra Mainyu Great Avesta) またはアンラ・マインユ (Anra Mainyu Young Avesta) とも呼ばれる。アフラ・マズダーが空、水、大地、植物、動物 (牛、犬、鶏など)、火など善き創造を行うのに対して、アーリマンは、病、悪臭、腐敗、災害、傷、サソリ、フクログモ、トカゲ、ヘビ、アリなど悪い創造を行う。

アーリマンとアフラ・マズダーの間は断絶していて、両者は敵対しあっている。ゾロアスター教徒はアフラ・マズダーの善き創造をアーリマンの悪い創造から守らなくてはならない。この働き、つまり、病、悪臭、腐敗、災害、傷から空、水、大地、植物、動物 (牛、犬、鶏など)、火を守るための行動や生き方、さらにアーリマンの悪い創造から自分を守るための行動や生き方が、パーシーにおいては「精神的にも物質的にも清浄であること (yaozda-) は最も善きこと」という考え方で強調されていく。

12) ドゥルジ (druj) はドゥルグ (drug, OP.drauga) とも呼ばれ、女性の悪魔 (daeva : dev)

である。虚偽 (lie)、病気(disease)、不浄(impurities)、腐敗(decay)などを、精神的にも物質的にもおよぼしていく。これらを選ぶ人たちはドレグワント (dregvant) と呼ばれ、アシャを選ぶ人たちと対立している。

- 13) 伊藤義教 1967 『世界古典文学全集』3巻 p.368 参照。

ヤスナ第27章13節

- 14) コルシェド・ニアエーシュ (Khorshed nyayesh 太陽への祈り) 103回, メヘール・ニアエーシュ (Meher nyayesh ミトラへの祈り) 65回, マー・ニアエーシュ (Mah nyayesh 月への祈り) 65回, アルドゥウィスラ・ニアエーシュ (Ardivisura nyayesh 水への祈り) 65回, アターシ・ニアエーシュ (Atash nyayesh 火への祈り) 65回, ゲー (gah nyayesh 5刻限の祈り) 65回, パテート (patet 罪を悔いる祈り) 121回 (12回のアシェム・ウォフーで), アフラ・マズダー・ヤシュト (Ahura Mazd yasht アフラ・マズダーへの祈りの一つ) 103回 (12回のアシェム・ウォフーで), サローシュ・ハドクフト (Sarosh hadokht サローシュへの祈りの一つ) 75回, サローシュ・ヤシュト・ワディ (Sarosh yasht vadi サローシュへの祈りの一つ) 103, アフリンガン (afriangan 聖なる火を前にして二人の祭司によって行われる祈り) 121回 (12回のアシェム・ウォフーで), 5ガーター (gathas 年末の最後の5日間の祈り) 1200回となっている。

- 15) アシャ (asha) は、ゾロアスター教の教えの中で重要なものの一つである。正義 (righteousness)、秩序(order)、理法(law)などと訳されて、精神的なものであれ物質的なものであれ、すべてのものを最も望ましい形に成り立たせている原理を言い表している。

ゾロアスター教の教えによると、人間一人ひとり、現実の生活における考え、発話、行動のすべての面において、善か悪かのいずれかを選びとっていき、その結果、善と悪のどちらが他方を超えるかによって救いが決まると信じられている。ゾロアスター教徒の現実の生活のそうした選びの過程で、確かな拠りどころとされるものがアシャである。例えば、身も心も清潔であること (yaozda-) は、それがゾロアスター教のさまざまな複雑な清祓儀礼をとおして実現されたものであれ、あるいはゾロアスター教の教えにしたがって悪魔 (daeva) のすることをしてしないことによって実現されたものであれ、アシャに結びつけられている一つの善き選びである。

- 16) 伊藤義教 1967 『世界古典文学全集』3巻 p.365 参照。

ヤスナ第27章14節：41章7節

- 17) それぞれ次の場面で唱えられるアシェム・ウォフーは、その他の場面で唱えられるアシェム・ウォフーの何倍もの価値があると考えられている。それらの価値を回数で表すと、食事のとき、10回、眠りに就くとき、1000回、眠りから覚めて起きるとき、10000回、死に際して、すべての大陸の値段に値する回数となる。

- 18) 伊藤義教 1967 『世界古典文学全集』3巻 p.368 参照。

宗教的意味の伝達と変容—ゾロアスター教徒パーシーの祈りを材料として— (中別府 温和)

ヤスナ第 27 章 15 節

19) 伊藤義教 1967 『世界古典文学全集』 3 巻 p.368 参照。

ヤスナ第 46 章 7 節

20) 拙論 1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」
『西日本宗教学雑誌』第 17 号所収 pp.1-15

1996 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」
『西日本宗教学雑誌』第 18 号所収 pp.13-25

21) 拙論 1999 Historical Development of Panthaks among the Bhagarsath Priests in
Navsari.

Bulletin of Miyazaki Municipal University Vol.7 No.1 pp.67-85

22) 拙論 1989 「インドにおけるゾロアスター教の存続と変容」
『宗教間の協調と葛藤』所収 佼成出版社 参照。

引用参考文献

Paul Tillich

1957 Dynamics of Faith N.Y.Harper pp.1-9

谷口美智雄訳

1961 『信仰の本質と動態』

岸本英夫

1961 『宗教学』 大明堂 pp.17-33

中別府 温和

2000 「時間および空間感覚研究序論」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 7 巻第 1 号
pp.87-103 参照。

2000 「マヤユカテカの一カトリック村落マニにおける祭壇と聖像について」
『西日本宗教学雑誌』第 22 号 pp.15-26

Friedrich Heiler

1958 Das Gebete München 1918 : Prayer, 2nd ed., Oxford University Press
『祈り』

棚次 正和

1998 『宗教の根源—祈りの人間論序説—』 世界思想社
pp.27-48 : pp.214-216 : 221-222 : pp.252-256

William James

1902 The Varieties of Religious Experience. New York.

梶田 啓三郎 訳

1970 『宗教的経験の諸相』岩波書店

J.J.Modi

1932 The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees. pp.333-353

伊藤義教

1967 『世界古典文学全集』3巻 筑摩書房 pp.365-368

中別府 温和

1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」

『西日本宗教学雑誌』第17号所収 pp.1-15

1996 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」

『西日本宗教学雑誌』第18号所収 pp.13-25

1999 Historical Development of Panthaks among the Bhagarsath Priests in
Navsari.

Bulletin of Miyazaki Municipal University Vol.7 No.1 pp.67-85

1989 「インドにおけるゾロアスター教の存続と変容」

『宗教間の協調と葛藤』所収 佼成出版社 参照。